

氏 名	藤 田 典 子	
学 位 の 種 類	博士（美術）	
学 位 記 番 号	博美第 12 号	
学位授与年月日	平成 2 8 年 3 月 2 5 日	
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当者	
題 目	学位論文題目	空想世界の全景を目指し、細密版画を構成・展開させる新たな版画表現の可能性—緻密な描線により画面を埋め尽くす方法の先にあるもの—
	研究作品題目	《空想の全景図》2015 年 11 月制作、市民ギャラリー矢田第 5 展示室にて個展形式で発表 使用作品 《nightmare》2012 年制作、紙、インク、エッチング、535mm×695mm 《bedroom1、2、3、4》（連作）2011-2015 年制作、紙、インク、エッチング、各 350mm×350mm 《cave1、2、3》（連作）2013-2015 年制作、紙、インク、リトグラフ、910mm×1167mm 《view》2013 年制作、紙、インク、リトグラフ、1303mm×1630mm 《mother》2014 年制作、紙、インク、エッチング、240mm×300mm 《embryo》2014 年制作、紙、インク、エッチング、240mm×300mm 《gigi》2012 年制作、紙、インク、エッチング、360mm×360mm 《nesting》2015 年制作、紙、インク、エッチング、240mm×200mm
論文審査委員	主 査 教 授 倉 地 久 副 査 教 授 設 楽 知 昭 副 査 准 教 授 高 梨 光 正 外 部 女 子 美 術 大 学 審 査 委 員 教 授 清 水 美 三 子	

1 学位論文の要旨

本研究は、複数の独立した細密版画作品を展示空間内に再構成させることによって、更なる大きな世界観を持った一つの絵画空間作品《空想の全景図》の制作を行い、新たな版画表現の可能性を提示するというものである。

《空想の全景図》とは、筆者の漠然とした大きな空想の世界観の中から一場面として作品化された複数のイメージを、連結や複数性を利用した配置などの方法を用いて、展示空間内に体系化させた絵画空間そのものを指す。単に作品同士を並べて繋ぎ合わせるだけでなく、作品群を物語の順序、図像の関係性、視覚効果などそれぞれの相互関係から再構成することによって、無意識下ですでに形成されていながらまだ視覚化されていないイメージ、つまり研究者自身の内的空想の世界観そのものを提示し、空想世界の全体像を明らかにすることが本研究の目的である。個別の細密版画作品の特徴を生かしながら、展示空間全体で空想の世界観を疑似体験できるような作品となることを意図している。

第1章では《空想の全景図》を創出する意義について述べるとともに、どのようにそれぞれの個別作品を新たなひとつの版画作品として構築していくかという点について、版画の特性である複数性という観点から考察する。その結果《空想の全景図》を創出することは、作者自身も気がつかない未知の領域を表出させ、作者の意図を超えた新たな世界観をもった作品を生み出す方法であると述べている。そして、それぞれの作品に補完関係によって新たなアイデンティティ（＝世界観を構成する役割）を与え、さらなる新たな意味合いを持つ作品として昇華させる取り組みであると結論づけている。

第2章では《空想の全景図》を形成する最小の単位である微細な描画法について、点刻や間接表現法といった版画技法の特質という観点からそれぞれの作品との関係性について考察する。

第3章では、2015年11月に個展という形で発表した、細密版画的再構成による空間作品《空想の全景図》を体系化させる方法と全体の構造について、動線、物語の順序、図像の関係性、視覚効果などから考察を行ない、得られた結果について論述する。

第1章、第2章の内容を踏まえ、第3章において版画表現の特性である複数性や反転性を応用させ、その研究成果として制作された全景図について考察を行なった。その結果《空想の全景図》は、個別作品を再構成し全体像を作ることによって、展示空間内で各場面が有機的関係性を持ちながら、連続的かつパノラマ的に繋がっていく視点をもった構造の作品となった。この再構成によって、空想の一場面としての単純な構造の作品群は、登場人物がさらわれ、幽閉され、迷宮をさまようといった物語を形成し、それを鑑賞者の動きに合わせて始まりから終わりまでを提示することが可能な一つの作品へと大きく変化した。

全体像の中で何度も現われるシルエットのみが浮き彫りとなった顔のない人物は空洞となり、孤独さや匿名性が高まると同時に、薄れていく自我が表現されている。それは加速し続ける情報過多な現代社会において、思考を放棄して希薄化する自己の象徴のようでもある。さらに、入口と出口が繋がった循環する展示構造によって、この物語が輪廻転生のように何度も繰り返されるとということが示唆されており、それはまるで強制的に与えられた人生の中で、生きる意味を求めてさまよい、やがて朽ち果て、また生み出されるといった、繰り返される人間の一生をも想起させる結果となった。

こうして得られた不条理な物語性や、循環構造によって輪廻転生を示唆する展示方法は、一枚絵としての作品ではなし得なかった表現であり、個別作品の再構成によって新たな作品としての概念が生み出されたと言える。特筆すべきは、従来の作品がもつ細密性や緻密性といった版画の特性を、理念に基づいた配置と融合させる事によって、既存の版画表現を大きく超えた壮大な世界観をもたらせた事である。

さらに、細密性や緻密性にこれら配置の特性が加わる事により、1点1点の作品性が際立っただけではなく、緻密な点や線が放つ有機生命のような強いうごめきが今まで以上に再認識でき、さらに増感させることに繋がったと言える。これは、細密版画的の魅力であるディテールを見る楽しみを空間全体に拡大し発展させた、新たな展示方法であると言えるだろう。

以上の結果から、空想世界の全景を目指し、細密版画を構成・展開させた今回の研究である《空想の全景図》は、単なるイメージの集合体ではなく、緻密な描線により画面を埋め尽くす方法を最大限に生かしながら、研究者自身も知り得ない内的世界観そのものを外

に向けて提示し、非現実を覚醒状態にありながら体験する場を、他者と共有することができる新たな版画作品であると結論づける。

2 学位論文審査の要旨

細密版画表現による全景図制作を異時同図法の観点から紐解き、論文の概要である章立てやその順序など、わかりやすく丁寧に解釈できる様に組み立てられている。構成される、テーマ・目的・手段・結論を明確に表し、それぞれの深度を深めながら論述している。特に、第1章「版による空想の再構成」では、全景図を創出する意義や版画の複数性を活用した作品群を再構成させる方法論など、テーマの根幹になる手段や目的の裏付けを、全景図の重要な骨格を担う異時同図法を検証しながら書き記している。第2章では全景図を形づくる細密版画表現について、技術的、創作的観点から検証を行っている。技法や描法の実証データ検証や版画独特のモノクローム表現、パノラマ性を帯びた全景図の創作の考え方や検証、そしてそれらが最終的に自作品の検証考察へと繋がっていく。具体的には、緻密な描法によって制作された銅版画やリトグラフ作品の一枚絵として自立した作品を、連結、体系化、複数による展開及び配置などの方法を用いて、無意識下ですでに形成されているが、まだ視覚化されていないイメージ、つまり研究者自身の新たな世界観そのものを提示する版画表現の可能性を明らかにすることである。また、技法データ検証ではリン酸使用法などリトグラフの専門的な制版法の実証実験を記述し、技法の抽出に真摯に向き合い論文全体に厚みを増している。第3章では、11月の予備審査以降、新たに加えられた実作品制作と制作概要について、個々の作品群、全景図を体系化させる方法論、新たな版画表現としての全景図へと続く3つの節を、順序立てて論理構築させながら論述している。

最終試験のための作品発表は、11月に開催された名古屋市民ギャラリー一矢田の展示空間を踏襲し、愛知県立芸術大学資料館において、同様の条件で再現し開催された。ギャラリー一矢田より空間の幅が広く、作品鑑賞への導線や空間の構造に若干の違いがあるものの、本論の内容を踏まえ、銅版やリトグラフ技法による子細な線描や点描、複数性や反転性等の版画表現の特質、本論で導き出した配置に対しての考察とが融合し、非常にレベルの高い展示となった。空間へと通ずる入口正面右側に進行方向に向かって設置位置が徐々に高くなり、壁から垂直に突き出たように設置された中型の版画作品が目を引き。これらの作品には、妖精が少年や少女を攫（さら）っていく光景が、エッチング技法によって緻密に描かれ、それらの作品の間には大きめのマット紙に装丁された額装作品が壁面に平行に設置され、双方が物語の経過を導くように、順序立てて配置されている。左側の壁面も同様に、右側の作品群と対になるように、中型銅版作品と額装作品が交互に順序立てて配置されている。

《nightmare》2012年制作、紙、インク、エッチング、53.5cm×69.5cm

《bedroom1》2011年制作、紙、インク、エッチング、35cm×35cm

《bedroom2》2012年制作、紙、インク、エッチング、35cm×35cm

会場の正面奥まで進んだ後、反転して戻る時に、先ほどの垂直に置かれた銅版画群が、鏡摺り技法によって摺られた反転した同じイメージと見ることが出来る。同イメージではあるが、往復でストーリーに違いが出る仕掛けがあり、版画の複数性を活用し、本論で記述されている異時同図法の意図が汲み取れる。

《nightmare》(鏡摺りにより反転された作品)、2012年制作、紙、インク、エッチング、53.5cm×69.5cm

《bedroom3》、2013年制作、紙、インク、エッチング、35cm×35cm

《bedroom4》、2015年制作、紙、インク、エッチング、35cm×35cm

正面壁面には、洞窟シリーズの大型リトグラフ作品3点が、夢に深く入り込み物語の到達点を象徴するかのように、配置されている。これらの作品群も、版画の複数性を利用し、他の版画作品の一部をコラージュ技法によって差し込む、異時同図法の概念がここでも活用されている。

《cave1》、2013年制作、紙、インク、リトグラフ、91cm×116.7cm

《cave2》、2014年制作、紙、インク、リトグラフ、91cm×116.7cm

《cave3》、2015年制作、紙、インク、リトグラフ、91cm×116.7cm

展示空間後方には、正面壁面の作品と対になるように、山や山脈に一人の少女が佇む大型のリトグラフ作品が設置され、部屋全体に全景図の広がりを与えている。

《view》2013年制作、紙、インク、リトグラフ、130.3cm×162cm

上記の左右の作品群から反転して戻る時に、洞窟から旅立っていく妖精に導かれながら、閉塞感のある洞窟とは対照的に、山という広がりのある世界観へと誘導している。

部屋の中央には、上面に小版画を埋め込んだ柱状の作品が連続的に置かれている。これらの作品は、「夢」が内包する、場面の不連続性や他視点性の特徴を取り入れる為、シンメトリー構造になっている左右の作品群との関係をあえて分断し、近視眼的な視点で緻密に描かれた世界観を増感させる役割を持っている。これらは、覗きこまなければ見ることが出来ない仕掛けになっていて、2種類の性質の作品が交互に配置されている。一つは、フレネルレンズと言う板状の透明シートにスリットが施したレンズを使用し、エッチングによる銅版画小作品の20センチほど上面に設置し、細部まで子細な描線を見ることが出来、彼女の夢の緻密な世界を疑似体験できるような工夫が施されている。もう一つは、銅版画で刷られた作品を紙芝居や3D絵本のような立体的にコラージュし、少年少女の儚さと若干の遊び心が感じられ、流れにアクセントを与えている。

《mother》、覗き込む視点、2015年、紙、インク、木箱、W25cm×D25cm×H91cm

《embryo》、浮き上がる視点、魚眼レンズを外した状態、2015年、紙、インク、木箱、魚眼レンズ W25cm×D25cm×H91cm

《gigi》、立体的な視点、2015年、紙、インク、木箱、W25cm×D25cm×H91cm

《nesting》、拡大する視点、フレネルレンズを外した状態、2015年、紙、インク、木箱、W24cm×D25cm×H91cm

展示空間全体の大きな特質として、大型リトグラフ作品による空間の正面と後方との相対的關係性、時間経過の反転性を応用した左右に設置したシンメトリー構造の作品群、上記の視点を分断させ場面の不連続性を重視した近視眼的な性質の3点の特徴がある。これらを活かし、本論の異時同図法の考え方、研ぎすまされた銅版技法やリトグラフ技法の卓越した技術力、日本の版画のオーソドキシシーの文脈を踏襲し、版画表現として新たな空間表現を構築していることを、高く評価した。

テーマの根幹になる全景図とは、複数の独立した細密版画作品を再構成させることによって、新たな世界観を持った一つの大型作品として作り上げることである。これに、この

細密な作品群と、異時同図という思考が交差することにより、より明確な方法の中で浮世絵や創作版画運動の文脈をもつオーソドキシな1枚絵としての版画表現を、新たな次元まで高めたことは特筆に値する。このような連携した作品群としての版画表現は、この領域において現在でも多く語られていないのが現状である。こうした状況下で本論を確立する事は、版画界に於いても大きな意味を持つものと考えられる。

以上のことから、外部審査委員を含む4名の審査委員は、藤田典子の論文「空想世界の全景を目指し、細密版画を構成・展開させる新たな版画表現の可能性—緻密な描線により画面を埋め尽くす方法の先にあるもの—」及び作品群は、博士論文審査において専門領域での優れた独自性と論理性を有し、博士学位に値する高い内容であると結論づけた。

3 最終試験結果の要旨

口頭発表に関しては、全体を通して解りやすく、論文の骨格を説いた内容であった。論文同様に、テーマ・目的・手段・結論に至る論文の概要を、限られた時間内でわかりやすく伝えることができている。また、制作された個々の作品の内容や空間を構成する作品群との関係性を、異時同図法の観点から明確に解いた内容であった。複数の独立した細密版画作品を再構成させることによる全景図は、個々のイメージの内容・作品群の導線・複数性や反転性などの版画の特性によって創られていて、最終局面である本試験時において、初めてすべての要素が集合し全景図となって全体が見ることができたと考えられる。

また、口頭試問に関しても、外部審査委員を含む4名の審査委員の質疑に対して、真摯かつ明快に返答が出来、今回のテーマに関して、深度の深い研究を行ったことを裏付けている。

版画には大きく3つの文脈が存在する。①浮世絵を起点に創作版画運動や戦後の版画芸術の確立へと繋がったオーソドキシな1枚絵としての版画表現、②モノ派やポップアートなど版画の方法論を活用した実験的な版表現、③欧米を中心にした視覚芸術（映像や印刷物など）を起点にした版画表現など、藤田氏の研究内容は、①のオーソドキシな文脈にありながら、1枚のイメージや1枚のストーリーから出発し、それらの作品群を束ねる新たな構成方法を発掘した点にある。細密版画というレベルの高い技術と描画力を持つクオリティーの高い版画作品として成立させ、かつそれらを集合的特性（異時同図など）で連結させる内容は、独自性と発展性を併せ持ち今後の展開を大いに期待させる内容である。

以上のことから、外部審査委員を含む4名の審査委員は、博士後期最終試験において高度な論文と作品の内容であると判断し、実技系博士論文に望まれる基準以上に満たしており、学位の資格授与に値すると結論付けた。